

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 2 月 12 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	川北 安奈

1. 派遣国・場所 (○○国、○○地域)
埼玉県こども動物自然公園
2. 研究課題名 (○○の調査、および○○での実験)
SHAPE-Japan ワークショップの企画・運営補助
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 2 月 9 日 ~ 平成 29 年 2 月 11 日 (3 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)
The Shape of Enrichment 日本支部 “SHAPE-Japan” (http://www.enrichment-jp.org/)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>2月10日と11日に埼玉県こども動物自然公園で開催されたSHAPE-Japan主催の環境エンリッチメント実践型ワークショップに運営補助として参加した。</p> <p>このワークショップは昨年京都市動物園で初めて開催され、その時はライオンやトラなどの肉食動物のエンリッチメントがテーマであった。全国から動物園・水族館関係者や研究者たち約50人が集い、アニマルウェルフェアや行動観察法について学んだり、各班に分かれて対象動物のエンリッチメントに取り組んだりする。昨年は1日のみの開催であったが、第二回にあたる今回は2日間にわたっておこなわれた。テーマは「草食動物のエンリッチメントを考える」で、対象動物はニホンカモシカ、マール、ヤギ、ウマ・ポニー、ベネットアカクビワラビーの5種であった。</p> <p>1日目の前半は座学で、岐阜大学の二宮茂先生が環境エンリッチメントについて、京都大学野生動物研究センター(PWS 履修生)の齋藤美保さんが野生キリンの母仔関係からみた社会構造について、SHAPE-Japan 事務局メンバー(東京都多摩動物公園)の山崎彩夏さんがエンリッチメント実施にむけた具体的な内容をお話された。二宮先生のレクチャーではウシやウマの研究内容が紹介され、ウシの舌を使った常同行動は一度形成されるとその行動自体が目的となってしまうため止めさせるのが難しいことや、暑いときに日陰に入る環境選択のエンリッチメントがあることが印象的だった。齋藤さんの発表では野生キリンの母とオスの仔の結びつきに関する話があり、それを受けて質疑応答では飼育下における余剰オスの扱いが話題になった。私は答えにくい問題だと感じたが、齋藤さんが野生の観察で得られた事実とそれに基づく意見を述べていて、その一連のやりとりから学ぶものは大きかった。山崎さんはアニマルウェルフェアの前提には動物の利用があること、エンリッチハラスメントと揶揄される場合もあることなどをお話され、倫理的な側面から考えさせられた。</p> <p>その後、参加者の自己紹介や今回対象となる動物の紹介がなされ、班ごとの実践型ワークショップが始まった。私はニホンカモシカ班を主に見学させてもらった。本動物園の「シカとカモシカの谷」は市民ZOOネットワークによる「エンリッチメント大賞2012」を受賞していて、私も大好きな展示環境である。丘陵地帯を活かした展示で、これ以上の工夫の余地がないのではないかと思ってしまう場所であった。ある班員の予習情報によると、野生のカモシカは一日のうちの6割の時間を反芻と休息に費やし、2割の時間で採食、残りの2割で移動するという。本来活動性の低い動物で、しかもある程度恵まれた</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

環境にいると思われる個体のエンリッチメントはどのように考案されるのか、とても興味深かった。今回のエンリッチメントの目的としてはカモシカの臭いつけ行動と採食行動を増やすことが設定され、麻袋やブラシが取り付けられたり、竹筒を使用したフィーダーが設置されたりした。他の班でもフィーダーの案は多く見られ、全体的に草食動物のエンリッチメントは発案が難しいと感じた。ウマ・ポニー班は「老馬に休息を」というテーマで、やんちゃな若い個体たちから年老いたメス個体を守るためにフィーダー作成をしたりしていた。フィーダーという点は他の班と共通しているが、フィーダーの形や内容物が違うのはもちろん、単独飼育のカモシカとは異なりウマ・ポニーの社会関係の改善を目的としていた点でも面白かった。

エンリッチメントは各動物種がもつ本来の行動や社会に配慮して実施される必要がある。そのため野生動物の研究も求められるだろう。ただし、個体差や飼育環境の違いが必ずあるので、一つの動物園で効果が見られたからといって他でも有効とは言い切れない。普段からその飼育個体をよく観察し、エンリッチメント導入の前後で行動などを比較して評価しなければならない。評価の客観性や信頼性を高めるためには行動観察法の利用が便利で、その説明が2日目に SHAPE-Japan 事務局メンバーの山梨裕美さん(京都大学野生動物研究センター)や橋本直子さん(京都大学霊長類研究所)からなされた。班ごとに相談してサンプリング方法や記録方法を定めるのだが、行動をきちんと定義するのが難しそうだった。1-0 サンプリング法を使う班が多く、自分の研究でこれを使用していないため少し違和感を抱いた。しかし、臭いつけ行動や攻撃行動といった継続時間の短い行動を調べるためには有用だと理解した。

今回は埼玉県で2日間にわたって開催されたが、全国からこれだけ多くの動物園関係者が休みを取ったり休みを返上したりして参加されていたのには本当に驚いた。ある飼育員さんに自分の研究について聞いてもらう機会があり、野生キリンの木陰と日なたでの行動の違いを説明したら「それを早く論文にしてほしい」と言ってくれてとても励みになった。制限された環境の中で理解が十分に進んでいない動物を飼育するのは困難が多く、飼育担当の方々は日々試行錯誤されていると思う。みんなの(市民の)動物、いのちを預かっている、ということでも責任を感じてらっしゃるかもしれない。もし将来的に私の研究がそのような方々の一助となればそれほど嬉しいことはないし、ひいては動物園のキリンの生活の質向上につながれば、と希望をもちながら今できる自分の研究に努めたい。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



集合写真 (SHAPE-Japan HP より)

6. その他 (特記事項など)

今回お世話になりました SHAPE-Japan 事務局のみなさま、岐阜大学二宮先生、齋藤美保さん、ボランティアスタッフのみなさま、参加者のみなさま、どうもありがとうございました。また、この機会を提供して下さった PWS にも感謝申し上げます。